ラテンアメリカ
随想

小さなサッカー大国 ウルグアイ
ーサッカーの歴史に愛された国

村上 猛（在ウルグアイ大使館 一等書記官）

南米人にとってのサッカー

南米人にとって、サッカーは人生そのものだ。南米では、ワールドカップが終わった翌年から、次のワールドカップに向けた南米予選が始まる。そのことからも、南米人の人生が、サッカーをサイクルに回っていることがよくわかる。

『収奪された大地　ラテンアメリカ五百年』で知られるウルグアイを代表する作家、エドゥアルド・ガレアーノ（Eduardo Galeano）は、『スタジアムの神と悪魔　サッカー外伝』を執筆するなど、サッカーに対する造詣が深いことでも有名だが、彼は次のように述べている。「ラテンアメリカでは、サッカーを抜きに何かを語るのは難しい」「無神論者（ateo）のいない唯一の宗教、それがサッカーだ」と。そして私は今、そんな彼の言葉を肌でひしひしと感じながら、ここウルグアイで生活している。

ウルグアイサッカーの栄光の歴史

ウルグアイは人口約340万人、横浜市よりも人口の少ない国だが、隣国のブラジルやアルゼンチンをはじめ、強豪ひしめく南米において、輝かしい栄光の歴史を有するサッカーの強豪国だ。FIFAワールドカップ優勝2回、オリンピック優勝2回、コパ・アメリカ（南米王者を決める大会）優勝15回（最多!!）の実績を有し、最近では、今年（2023年）6月に隣国アルゼンチンで開催されたFIFA U-20ワールドカップの決勝でイタリアを破って優勝した。ルイス・スアレス（スペイン、イングランド、オランダの3つのリーグで得点王、現グレミオ所属）、エディンソン・カバーニ（イタリアとフランスの2つのリーグで得点王、現ボカ・ジュニアーズ所属）、フェデリコ・バルベルデ（現レアル・マドリード所属）、ディエゴ・フォルラン（2010年FIFAワールドカップMVP、2014-2015にセレッソ大阪に所属）、アルバロ・レコバ（「左足の魔術師」の異名を持つ。元インテル所属）などの選手は、日本でもサッカー好きの人なら知らない人はいないだろう。ジネディーヌ・ジダンの子どもの頃の憧れの選手であったエンツォ・フランチェスコリも、ウルグアイの選手だ。

ワールドカップの歴史を紐解いてみたい。日本ではあまり知られていないかもしれないが、記念すべき第1回FIFAワールドカップは、1930年にここウルグアイで開催され、開催国のウルグアイが、決勝でアルゼンチンを破って初代世界王者のトロフィーを手にした。ウルグアイが開催国に選ばれたのは、直近のオリンピック・サッカー競技で2大会連続優勝した実力と、ウルグアイ憲法発布100周年の事業として「近代的な」スタジアムの建設を約束すること、を主な理由とするものであった。その約束のスタジアムであり、第1回大会の決勝地となったセンテナリオ・スタジアム（Estadio Centenario）は、「FIFA決勝の聖地」と呼ばれており、ウルグアイ人の

写真1：1930年の建設当時の原形をとどめている、「FIFA決勝の聖地」センテナリオ・スタジアム（写真はすべて筆者撮影）

誇りであり、今も現役のスタジアムとして数多くの国際試合や国内リーグの試合が行われている[1]。

1950年にブラジルで開催された第4回FIFAワールドカップも、ウルグアイサッカーの歴史において忘れられない大会だ。地元ブラジルとウルグアイの間で行われた決勝リーグ第3戦[2]、ブラジルは引き分けでも優勝が決まる状況であった。試合は、前半は両チーム無得点に終わるも、後半開始2分にブラジルが先制、この瞬間、会場のマラカナン・スタジアムを埋め尽くしたブラジル人の観衆は自国の初優勝を確信する。しかし、後半21分にウルグアイが同点ゴール、その13分後に奇跡の逆転ゴールを決めて、試合終了。ウルグアイが2度目のワールドカップ・トロフィーを手にした。その瞬間、会場は水を打ったように静まり返り、2人がその場で自殺、2人がショック死、20人以上が失神して、ブラジルサッカー史上最大の事件となった。かの有名な「マラカナンの悲劇」(Maracanazo)である。あまりの惨事に表彰式は行われず、FIFA会長のジュール・リメ自らがピッチに下りていって、ウルグアイ代表のキャプテンを探し出し、こっそりトロフィーを手渡したのは有名な話。この試合を最後に、ブラジル代表は、それまで白色だったユニフォームを黄色(カナリア色)に変えることになる。卓越したキャプテンシーにより「黒い闘将」(negro jefe)と呼ばれ、ウルグアイ代表のキャプテンを務めたオブドゥリオ・バレラや、この試合で奇跡の逆転ゴールを決めたアルシデス・ギジャは、今もウルグアイの英雄である。

写真2:「マラカナンの悲劇」で、ウルグアイ代表がゴールを決めた瞬間(サッカー博物館内)

また、通常、サッカーの代表ユニフォームには、自国のエンブレムの上部に、ワールドカップで優勝した回数と同じ数の星が刻まれている。ワールドカップの最多優勝国はブラジルの5回、続いてドイツとイタリアが4回、それに続くのがアルゼンチン、フランス、ウルグアイの2回だ。ウルグアイがワールドカップで優勝したのは1930年の第1回大会と1950年の第4回大会の2回だが、実は、ウルグアイ代表のユニフォームには4つの星が刻まれている。1930年以前、まだワールドカップが存在しなかった時代、サッカーの世界一を決める大会はオリンピックであった。上述したとおり、ウルグアイは1924年のパリ五輪と1928年のアムステルダム五輪のサッカー競技で連覇を達成した。この2つの優勝もカウントされて、現在、ウルグアイ代表のユニフォームには4つの星が刻まれているというわけだ(これについては、サッカー界で賛否両論があるが)。

こうしたウルグアイサッカーの輝かしい栄光の歴史については、上述のセンテナリオ・スタジアム内に併設されているサッカー博物館(Museo del Fútbol)で、数多くの獲得トロフィーとともに、垣間見ることができる。

ウルグアイ国内リーグの盛り上がり

ウルグアイは国内リーグ(Campeonato Uruguayo)も盛んだ。ナシオナル(クラブ世界一3回、国内リーグ優勝49回)とペニャロール(クラブ世界一3回、国内リーグ優勝51回)がウルグアイを代表する2大クラブで、ウルグアイ国民は概ねどちらかのクラブのファンに二分される。両者がぶつかる試合は「クラシコ」(伝統の一戦)と呼ばれ、スタジアムは満席となり、大きな盛り上がりを見せる。そんな私もナシオナルのソシオ(クラブ会員)なので、ホームのグラン・パルケ・セントラル・スタジアム(1900年に建設、第1回FIFAワールドカップ開幕戦の会場となり、今も現役の米州で最も古いサッカースタジアム)をはじめ、毎週欠かさず試合観戦に行っている。

かつては何度もクラブ世界一に輝き、強豪を誇った国内クラブも、現在は、サッカーのビジネス化(グローバル化)が進んだことにより、有望な選手は国内リーグで実績を積んで、欧州をはじめとする海外のクラブに移籍するのが定石となっている。各クラブも、有望な選手を育てて、国内の2大クラブや、ひいては海外のクラブに選手を売って相応の移籍金を獲得しながら、クラブ経営を成り立たせている。ウルグアイでは、あるシーズンにクラブが優勝すると、その後有望な選手が次々と海外のクラブに引き抜かれ、チーム全体が総入れ替えとなり、次のシーズンは弱くなってしまう、ということがよくある。したがって、世界的なサッカービジネスの観点から見れば、ウルグアイの国内リーグは、有望な選手を育成し、彼らを巨大

な世界市場に輩出する土壌として機能していると言えるだろう。

一方で、こうした2大クラブの試合や有望選手の動向を追うのも面白いが、実は、ウルグアイサッカーの醍醐味は、2大クラブ以外の中堅クラブがホームを構える、郊外のスタジアムで行われる試合にある、と私は思っている。スタジアム（estadio）と言うよりは、サッカー場（cancha）と呼ぶ方が相応しいような、照明なし、観客席は簡素な、まるで古（いにしえ）にタイムスリップしたかのような牧歌的なサッカー場で、週末の昼下がり、地元の人たちと一緒にのんびりと、マテ茶を飲みながら激しいサッカーの試合を観るのは、まさに至福の時と言えるだろう。

写真3:郊外のサッカー場は、選手との距離が近い！

2030年FIFAワールドカップ[3]の招致に向けて

現在、第1回大会から100年後に当たる2030年のFIFAワールドカップ開催地に、ウルグアイ、アルゼンチン、チリ、パラグアイの4か国が共同開催国として立候補している。この開催招致が実現すれば、第1回大会の決勝地であるセンテナリオ・スタジアムで試合が行われることになるのは間違いない。

センテナリオ・スタジアムは、今や「近代的な」スタジアムとは言えない。だが、このスタジアムには、他のスタジアムにはない、独特の佇まいがある。スタジアムの中に足を踏み入れると、不思議とそれを肌で感じることができる。それは、数多くの選手の汗と涙、サポーターの歓声が、歴史と共に刻まれているからかもしれない。

昨今、世界のサッカー界では、ビジネスが優先され、過激化する流れがとどまるところを知らない。昨年（2022年）開催されたカタール・ワールドカップでも、スポーツビジネスの過剰化が長じて、「スポーツウォッシング」（国家などが、スポーツの巨大イベントを利用して、ネガティブなイメージや社会が抱える問題を覆い隠すこと）という言葉が話題になった。そんなウルグアイも、こうしたサッカーのビジネス化の潮流に抗うことはできないが、この地には、脈々と息づくサッカーの歴史があり、老朽化しながらも「味のある」サッカー場に足を踏み入れれば、そこにサッカーの原点を感じることができる。

第1回大会から100年目の記念大会となる2030年FIFAワールドカップを、ウルグアイを含む南米で共同開催することができれば、現代サッカーの過剰なビジネス化を見直すきっかけにもなるかもしれない。

写真4:センテナリオ・スタジアムで遭遇した、「左足の魔術師」レコバ元選手とのツーショット

写真5：サッカー選手はいつだって、子どもたちのヒーロー

1　1983年7月、センテナリオ・スタジアムは、FIFAにより、「世界サッカーの歴史的建造物」（Monumento Histórico del Fútbol Mundial）に認定された。

2　優勝を決める試合ではあったが、この大会では決勝にノックアウト方式を採用していなかったため、「決勝戦」とは呼ばない。

3　本稿は、2023年9月執筆時のもの。同年10月4日、FIFAは、2030年FIFAワールドカップをスペイン、ポルトガル、モロッコの3か国を主要開催国としつつ、ウルグアイ、アルゼンチン、パラグアイの南米3か国で開幕戦を行い、ウルグアイの首都モンテビデオで100周年記念式典を開催するとの、3大陸6か国共催で行う旨電撃発表した。

参考文献

Galeano, Eduardo (1995) *El fútbol a sol y sombra,* Buenos Aires: Siglo Veintiuno Editores.

Galeano, Eduardo (2017) *Cerrado por fútbol,* Buenos Aires: Siglo Veintiuno Editores.

Etchandy, Alfredo (2018) *Uruguay Tierra de Campeones,* Montevideo: Aguaclara Editorial.

（むらかみ たけし　在ウルグアイ日本国大使館 一等書記官）